

私の履歴書

谷口 吉生

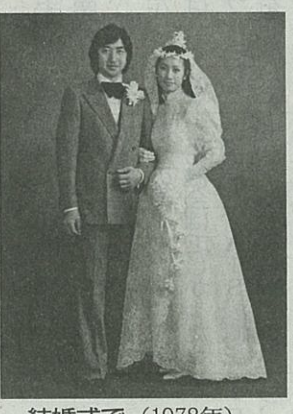
父の郷里である金沢に立つ命とささげたいものだった。金沢市立図書館（現・金沢波にのまれた建築物が開発の市立玉川図書館）。大きなガラスの開口部をもつ「図書館本館」と赤レンガ造りの「第二工場」を改修した「古文書館」から成るこの建物、父が私に協力してくれた最初で最後の協働作品となった。

父との協働 最初で最後

社交的な妻と知り合い結婚

金沢市立図書館

旧専売公社の跡地に残った「工場」は1913年に完成したもので、父はレンガの外観をそのまま保存するため、外壁を支える鉄筋コンクリートの構造体を内部に設置した。60年代に「博物館明治村」の創設に奔走した父にとっ



結婚式で（1978年）

と、こうした建築のための博物館「構想を立ち上げる。65年、用地と資金を提議した同社の協力を得て「明治村」をとおく口にするだけである。実現させ、自ら館長に就いた。「金沢市立図書館本館」の設計に求められたのは最新の機能をもつ新しい時代の図書館だ。開架の貸出し部分を中庭を隔てて独立させ、透明感ある広々とした空間に書架や椅子を点在させて公園で読書

私の履歴書

谷口 吉生

父の事務所を継いだ「谷口建築設計研究所」に、写真家三木淳氏が訪ねてくれたのは1980年代初めのことだったと思う。

展示室と収蔵庫 土中に

戦時のネガ保存法から着想

郷里の山形県酒田市に全作品を寄贈し、同地に日本で初めての写真専門の美術館を作ることにした。土門氏は病で倒れ、昏睡状態にある。設計を誰に頼むか思案する中で、「谷口」という建築家がい」と師匠が口にしたことを思い出されたという。

場所が最上川の川岸にあるとして心に残った。戦中、飯森山文化公園。もとは水田だったところを整備し、人工池が造成されることになっていった。私の設計はいつも敷地に何度も足を運び、周囲を歩き回ることから始まる。敷地には蓄積された歴史の痕跡や自然があり、それらが建築を



「酒田市土門拳記念館」(彰国社写真部提供)

設計前、どんな建築がふさわしいかを亀倉さんと相談すると「あなたの建築は洗練されているが、泥臭い感じが好きな土門に合うか疑問だ」と言われた。展示のための建築はそれ自身が主役になるのではなく、作品を引き立たせる「額縁」でよいのではないかと話すと、納得されたようだった。この縁で亀倉さんとその後も親しくお付き合いをするようになった。(建築家)

私の履歴書

谷口 吉生

「今、何を設計しているの？」彫刻家のイサム・ノグチ氏がアトリエの和泉正敏さんたちと夕食を囲む間も仕事の話はほとんど出なかった。ところが、父がその場で「新萬来舎」と名付けられることになる教員ホールをインテリア・デザインをお願いする。それ以来、家族ぐるみの付き合いをするようになり、洗

年の差33歳でも友人に

彫刻置き「場所」を「空間」に

「何となく電話を切った。12月、大連に帰る。戦後初めての来日を果たした時には、新進鋭の米国人彫刻家を歓迎しよう」と言っていた。父は「外で食べよう」と言ってテラスにテーブルを出し、くつろいで雰囲気の中で食事をした。ハワード留学中には、画家の長谷川三郎、若手同好者も多かった。いつの間にか定かでないが、ハドンの川岸に建築家のルイス・カーンと共に計画していた「リバーサイド・ドライブ遊園地」

「この建築おもしろい。足の我が家にも遊びにいらした。イサムさんが来ると父は「外で食べよう」と言ってテラスにテーブルを出し、くつろいで雰囲気の中で食事をした。ハワード留学中には、画家の長谷川三郎、若手同好者も多かった。いつの間にか定かでないが、ハドンの川岸に建築家のルイス・カーンと共に計画していた「リバーサイド・ドライブ遊園地」

「この建築おもしろい。足の我が家にも遊びにいらした。イサムさんが来ると父は「外で食べよう」と言ってテラスにテーブルを出し、くつろいで雰囲気の中で食事をした。ハワード留学中には、画家の長谷川三郎、若手同好者も多かった。いつの間にか定かでないが、ハドンの川岸に建築家のルイス・カーンと共に計画していた「リバーサイド・ドライブ遊園地」



イサム・ノグチ氏(左)と

「葛西臨海水族園」ができた。敷地の著しく軟弱な地盤やメタンガス発生への対応など技術的に克服しなければならぬ多くの課題があった。イサム・ノグチの「水槽をマグロの要望も途中で出た。完成間近のころには、生育環境を統一できたと思う。水族館は子供のための施設だと考えられていた。私は大人の関心も引いて知的好奇心を満足させる水族館を目指すと同時に、館内のレストランでビールやワインを置くことも提案した。また当時、水族館は団体の入場者が多く、考えられていた環境が美しい魚が群れる場所の中で、一人で静かに憩え、何回でも訪れたくなるような施設をあえて意図した。「90年代以降の水族館の展示手法や建築空間の質が格段に向上したのは、葛西の出現によることろが大きい」。建築専門誌でこのように評価されたことを私たちが設計にかかわった者は誇りに思う。(建築家)

私の履歴書

谷口 吉生

荒涼とした建設廃材の埋め立ての中に私はいた。対岸には数年前に開業した東京デイズ・ランドが見える。デイズ・ランドの非日常的な世界を内部に演出するため、周囲に木を植え、外側の景観を遮っている。夕暮れが迫る東京湾岸の敷地を歩きながら私は考えた。ここに計画する水族館の建築はその正反対で、東京湾の景観と一体になった幻想的な空間にしよう。

東京湾の景観と一体に

地盤やメタンガス 課題克服

現在も最も人気のある水族館の一つ、1989年に完成した「東京湾葛西臨海水族園」。直径100mの円盤型建築を地中に沈め、水を張った屋上が背後の東京湾の水

れを心配する声も挙がった。そこで、建物屋上の防水層はトレイ・レイ水族館には岩石やサンゴ礁などとともに海中を幻想的に再現した巨大な水槽があった。実際の岩を石ころでかたどって着色している。その後、テレビで皇居のお堀端へ向かって道を横切るカルガモ親子のニュースを見た時、ふと思いついて調べてみると、池の下が電気室であった。彫刻家でデザイナーの伊藤隆道氏の協力も得て、展示の職員と見学に赴いて、一滴も重た。



「葛西臨海水族園」(北嶋俊治撮影)

「90年代以降の水族館の展示手法や建築空間の質が格段に向上したのは、葛西の出現によることろが大きい」。建築専門誌でこのように評価されたことを私たちが設計にかかわった者は誇りに思う。(建築家)